

【福祉文化批評】

介護の根本にあるものは？

3年前に出版された六車由美氏の『驚きの介護民俗学』を読んだときの‘驚き’は今もって新鮮である。学問が持っている無限の可能性を改めて感じるとともに、私たちがいかに小さく凝り固まった常識の中に閉じこもっているかを痛撃された思いであった。

民俗学の研究者であった著者は敢えてその職を離れて介護職の道を選ぶ。介護の現場で著者が改めて発見したのは「介護現場は民俗学の宝庫である」ということだった。これは民俗学の基本的トレーニングを受けてきた著者なればこそその発見だが、言われてみれば誰にも納得できる事実であろう。70年も80年も生きてこられたお年寄りたちは、この間の日本社会の激動を我が身に引き受けて自らの人生を編みあげてきたのだし、また個々人のそれぞれ異なる生き様が絡み合って、総体として日本の戦後が作られてきたのだから、民俗学の代表的な手法である「聞き書き」によって実に多種多様な民族の歴史を再現することができるのは見やすい道理である。

介護とは単に「食う・寝る・排泄する」の援助をしたり、認知症予防の対策として体操やレクリエーションをやることに矮小化されるべきではない。むしろその基本は、この時代を作りあげ、やがて舞台を去っていこうとしている現世代から、次の世代がその成果や課題をしっかり受け止め、新たな時代を築くための糧とすることでなければならない。時代を生き抜いてきた人々の身体と心に刻み込まれた記憶を掘り起こし、記録して定着させることが、その人を人として尊重するということであり、そこに介護の根本があるのだ。

現在の介護現場でも「聞き取り」は行われている。その中でも「回想法」と名付けられた手法では、精緻に組み立てられた手順によって対象者の回想を促し、それによって対象者の心理的・身体的な活性化を促進する上で大きな効果があるという。だが、回想法においては聞き手が記録を取ることは禁じられている。記録するためでなく、相手と全面的に向かい合うために聴くことを求められるからだという。

そこでは、高齢者の「語り」の内容に焦点があるのではなく、語らせることの治療的効果が目指されていることがわかる。六車氏は、はじめは民俗学と回想法の類似点に注目して、大いに期待を持って取り組んだのだが、次第に回想法の進め方に違和感と疑問を持つようになっていく。ここでは明らかに「語り」の主体を巡る権力のあり方が問われている。回想法の語り手は治療の対象者と見なされ、主体は聞き手の方にあり、語りは徹底して手段化されているのである。他方、民俗学では、語る人こそが歴史の主体であり、聴く人はそれによって語り手の世界に参加させてもらう従属者である。介護とは、生活の自立を失いがちな人々に必要な介助を行い、それによって一人のかけがえのない人間が主体的に生き抜くことを支援することではないのか。

すでに国民の四分の一以上が65歳を超える今日、介護問題が喫緊の国民的課題であるこ

とは言を俟たない。しかし、介護の根源にあるべき発想は効率の論理や経済性や操作性の論理でなく、人間の尊厳を土台に置いた「主人公としての人間」への眼差しでなければなるまい。